



TITLE:

<海外での取り組み>海外関係の活動の経過報告

AUTHOR(S):

矢嶋, 吉司; 安藤 和雄

CITATION:

矢嶋, 吉司 ...[et al]. <海外での取り組み>海外関係の活動の経過報告. 実践型地域研究中間報告書: ざいちのち 2011

ISSUE DATE:

2011-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/147981>

RIGHT:

海外での取り組み

海外関係の活動の経過報告

生存基盤科学研究ユニット 矢嶋 吉司

東南アジア研究所 安藤 和雄

京都大学東南アジア研究所が担当する生存基盤科学研究ユニット京滋フィールドステーション事業であるサイト型機動研究「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」（以下、京滋 FS 事業）では、フィールドステーション(FS)における実践型地域研究の一環として、アジアの開発途上国の人々、とくに友人や知人たちとの連携・交流を通して、互いに学びあい理解を深めるための活動を実施しています。

活動は、1. 海外からの研修員と見学者の受け入れ（アジアの開発途上国の友人たちを対象とした日本農村と文化に根差した農村開発の試みの見学プログラム）、2. 海外関連の活動（ラオス農村での伝統文化の保存による農村開発）、の 2 つがあります。訪問・見学先の住民や行政機関の関係者の方々や FS 関係者の協力・支援を受けて活動が継続されています。

1. 海外からの研修員と見学者の受け入れ

アジアの開発途上国の友人たちを対象とした日本農村と文化に根差した農村開発の試みの見学プログラム

京滋 FS 事業では、海外、特に、アジアの開発途上国から来日した友人・知人に、高齢化と過疎が進む日本の農村の現状と地域の文化に根差した新しい農村開発の試みを見学してもらっています。アジアの途上国の人々が、日本の経済発展の陰で衰退した日本農村の失敗を繰り返さないために、日本の農村の苦い経験や再生の活動を学び、それぞれの国における農村開発に活かしてもらいたいと考えています。

京滋 FS 事業が開始されて以来、これまで、JICA カウンターパート研修への協力、アジアの開発途上国からの見学者の受け入れなど 5 回のプログラムを実施しました。

(1) 2008 年 10 月、JICA カウンターパート研修への協力

国際協力機構（JICA）がバングラデシュ農村公社（BRDB）に協力し実施中の「行政と住民のエンパワメントを通じた参加型農村開発プロジェクトフェーズ 2（PRDP-II）」のカウンターパート研修（平成 20 年 10 月 5 日～11 月 1 日）に、安藤と矢嶋が協力しました。研修の目的は、日本の地域振興策とそれに対する地方行政と住民参加の役割を学び、プロジェクト運営に活かそうとするものです。

研修員は BRDB のアミヌル・イスラム・カーンさん（Mr. Khan Md. Aminur Rahman、リンクモデル推進室課長）とハサヌル・ホック・モラさん（Mr. Molla Muhammad Hasanul Hoque、タンガイル県カリハティ郡プロジェクト副担当官）の 2 名で、亀岡 FS の京都学園

大学で「プロジェクト保津川」関係者と懇談し、市民、行政、大学関係者のネットワークによる市民活動の現状を紹介していただきました。

10月14日から21日までの京滋地区の研修では、農村の過疎の現状や地域の文化に根差した地域振興の事例として、京都府亀岡市役所及び篠町自治会、南丹市美山支所と北集落、滋賀県甲良町役場及び自治会において、地方行政と住民自治、美山町北集落の地域振興活動などを見学しました。10月22日から26日は、広島平和公園見学の後、広島県中国山地の中山間地で、過疎高齢化地における地域振興策と、女性たちの生活改善事業を訪問しました。10月29日から31日まで、研修のまとめとしてアクションプランを作成しました。その間、10月15日に東南アジア研究所東棟1階会議室で、「『行政と住民のエンパワメントを通じた参加型農村開発プロジェクト（フェーズ2）』とBRDB、日本での研修」研究会を開催し、研修員がバングラデシュでの活動を発表しました。

帰国前に「日本の田舎で会ったのは年配の人々ばかりだった」と研修員が感想を述べていましたが、経済発展が成功し、アジアの途上国にとって目標である日本の農村の現状は彼らの目にどのように映ったのでしょうか、気になるどころでした。



写真1 亀岡FSにおける研修

(2) 2009年2月、バングラデシュ・ラオス・ミャンマーの見学者受け入れ

ラオス国立大学農学部教員3名、バングラデシュ3名、ミャンマー1名のNGO関係者、計7名が2月25日から3月13日まで来日し、亀岡市文化資料館、篠町自治会、南丹市美山町知井自治振興会、守山市野洲町などを訪問し、伝統文化の保存の必要性、自治会活動、過疎と高齢化が進む日本農村の現状視察と住民交流、生存基盤科学研究ユニットFS活動、河川改修事業などを見学しました。3月5日に亀岡FSを訪ね、プロジェクト保津川の活動と保津川舟運の歴史を聞いた後、保津川遊船の船頭さんとバングラデシュの参加者との竹竿操舟などの交流が行われました。守山FSには3月7日から10日まで滞在し、守山漁協の婦人部の食品加工作業を視察した後、漁師さんたちの琵琶湖保全活動の説明を聞き、琵琶湖で漁船に乗せてもらいました。3月8日の守山FSの研究会では、各国の参加者がそれぞれの活動について発表しました。また、野洲川河川改修事業、野洲川の水系、高谷先生の開発集落を見学させていただきました。その間の3月4日に広島平和公園を訪問しました。これらの見学には、安藤と矢嶋が同行しています。なお、3月5日から7日の3日間は、京都大学「アジア5ヵ国からの若手招へい研究者によるワークショップ『人間と自然との新パラダイム—地域研究の最前線—』」の海外からの参加者のエクスカージョンとの合同見学でしたので、大盛況でした。

3月11日、京都大学東南アジア研究所「生存基盤研究ユニットでの生存基盤にもとづく農村開発ワークショップ」で、日本訪問の経験を発表しました。参加者にとって過疎が進む日本農村の現状は、かなり大きな衝撃だったようです。また、伝統文化や景観の保全を通じた農村振興、伝統的な技術や知恵、道具類の保存の必要性や、戦争や原爆の悲惨さや残虐さに対する素朴な怒りなどを、日本訪問の印象として述べられました。



写真2 守山 FS、漁港での記念撮影

見学者の氏名と所属先

バングラデシュ・JRDS(NGO 職員)

モハマッド・ミザヌール・ラーマン(Mohammad Mizanor Rahman)

エムディ・アジム・ウッディン(Md. Azim Uddin)

エムディ・ショヒドウル・ラーマン・ミア・(Md. Shahidur Rahman Miah)

ラオス国立大学農学部ラオ伝統農具農民博物館・教員

イントン・ソンプー、(Mr. Inthong Somphou)

ブントン・カオチャンダ (Mr. Bounthone Kaojanda)

スパボン・ラッタナラシ(Mr. Souphaphone Rattanasasy)

ミャンマー 在ヤンゴン日本語学校・教員

キン・オンマル・フトエエ (Mrs Khin Ohnmar Htwe)

(3) 2009年8月～9月、バングラデシュ NGO 職員の見学受け入れ

2009年8月25日～9月5日まで日本滞在

8月28日の東京で開催された「社会的ソフトウェア構築ワークショップ ～『世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業：南アジア周縁地域の開発と環境保全のための当事者参加による社会的ソフトウェア研究』成果報告会～」で発表するために来日したバングラデシュの NGO 社会奉仕協会 (Society for Social Service: SSS) 職員ビモル・コンティ・クリさん(Mr. Bimal Kanti Kuri)とナズムン・ナヘル・カイザーさん (Nazmun Naher Kaizer; Shampa) の2名が、伝統文化を通じた新しい農村振興、過疎と高齢化が進む中山間農村の問題などを見学するため、8月29日から9月3日まで、滋賀県守山市(FS)、亀岡市(文化資料館、篠町自治会)、南丹市美山町(北集落、知井自治振興会)、山口県周防大島町を訪問しました。訪問には安藤と矢嶋が同行しました。南丹市美山町知井自治振興会や山口県周防大島町の NPO との意見交換では、住民だけでは集落の暮らしを維持できない過疎農村の現状を打開する解決策の一つとして、途上国の農村再生ボランティアの受け入れが

話題に上りました。具体的には、美山町では造林地の手入れを手伝う山林ボランティア、周防大島町では耕作放棄された段々畑を再生し、農村景観を維持する農業ボランティアの構想が出されました。労働力を海外に送りたいバングラデシュと生活環境の維持が急務の日本の関係者の利害が重なっているのでしょうか、話は大いに盛り上がり、可能性を検討することになりました。

周防大島町の耕作放棄された段々畑や斜面に一面に生い茂り、長い間手入れもされず荒廃するまになっている竹藪を見て、竹が重要な資材として現在も使われているバングラデシュに輸出すればいいのにと、バングラデシュの友人はつぶやきました。



写真 3 守山 FS の報告検討会

(4) 2009 年 11 月、インドのアルナチャル・プラデシュ州の見学者の受け入れ

11 月 27 日、インドのアルナチャル・プラデシュ州のリンチン・ツェリンさん (Mr. Rinchin Tsering, Brokpa の人たちの社会福祉協会会長)、ダニ・ドリさん (Mr. Dani Duri, Dirang 県保健局局长) を招いて、京滋 FS 事業の研究会を開催しました。リンチンさんとダニ・ドリさんが、それぞれ「Brokpa の人と社会福祉協会の活動」、「Dirang 県の医療と健康」というタイトルで報告しました。

11 月 28 日、29 日に、南丹市美山町知井地区北集落、知見集落を訪問し住民の方と交流する機会を持ちました。その際、過疎が進み耕作放棄地が増えている農村の現状を目にした見学者から率直な感想が聞かれました。また、広島市の平和公園を見学し、戦争と原爆の悲惨さに悲しみをこらえきれないようでした。詳しくは巻末資料 1 のニューズレター第 13 号を参照してください。



写真 4 美山町北集落での記念撮影

(5) 2010 年 1 月、ミャンマーからの見学者訪問

2010 年 1 月 25 日から 2 月 4 日まで、ミャンマーのキン・ウさん (Khin Oo, Yezin Agricultural University) とレイ・レイ・カインさん (Lay Lay Khaine, Pwint Phyu State Agricultural Institute) の 2 名の方が来日され日本の農村を見学されました。1 月 27 日から 2 月 3 日まで、京都府南丹市美山町、守山市、山口県周防大島町などを訪問し、過疎の進む農村の見学や住民との意見交換を行いました。その間、1 月 29 日に守山 FS の第 19 回研究会で、1 月 31 日に第

135回生存圏シンポジウム・第5回国際研究集会「南アジアの気象環境と人間活動に関する研究集会」でそれぞれ報告をしていただきました。

「守山の広々とした耕地の景観は、オーストラリアやドイツに似て美しい」とはキン・ウさんのコメントです。守山の広々とした耕地では、放棄され雑草が生い茂る耕地や、水田や畑から、杉などの林地への転化が皆無なことが、キンさんに守山の耕地景観の美しさをこのように表現させた理由であったのかもしれませんが。詳しくは、巻末資料1のニューズレター第15号を参照してください。

2. 海外での活動

東南アジア研究所実践型地域研究室では、急激な経済的発展が進むラオスの農村で、実践型地域研究として実施している伝統的な文化、農具や民具を保存する集落民俗資料館の設置を通じた新しい農村開発の試みと、京滋 FS 事業との連携を進めています。京滋 FS 事業の成果や日本の農村振興策の経験や知識を、ラオスの農村開発に活かすとともに、交流を通してお互いの理解を深めることを目指しています。この活動に関連して、2009年2月～3月、ラオス国立大学農学部ラオ伝統農具農民博物館の先生3名が、京滋 FS 事業を訪問し、日本の農村の現状と文化に根差した新しい農村開発の試みを見学しています。その際、見学者を受け入れてくださった亀岡市文化資料館、篠町自治会、南丹市美山町北集落、知井自治振興会の方々、FS 関係者には大変お世話になり、感謝しています。

ラオス農村での伝統文化の保存による農村開発

東南アジア研究所実践型地域研究室が実践型地域研究として実施するトヨタ財団アジア隣人ネットワークプログラムの助成プロジェクト「農村文化・歴史を重視するアジア農村発展モデルの提唱ーアジアの開発途上国と日本の実践的ネットワーク構築による農村文化再創造活動ー(代表安藤和雄)」は、世代を超えて受け継がれてきた生活の知恵や生業の知識、伝統的な祭りや協働の習慣などを積極的に再評価し、人々の「村に暮らす誇りや生きがい」を育て、精神的な結束を強化する文化の創造・再創造活動をアジア的な人的交流のネットワーク活動として実践することを目的としています。具体的には、日本の農村で現在実践されつつある、文化と歴史を再評価する農村振興、地域おこし活動を企画実践する日本の住民組織、NPO、地方自治体、大学関係者と、文化と歴史の再評価を農村開発、地域社会開発に取り入れていこうとしているラオスの村の住民組織、NGO、地方自治体、大学関係者とのネットワークを構築し、日本とラオスでの研修やワークショップを通じた相互学習により、それぞれの運営方法や農村文化・歴史をアジア的視点によって評価し、各々の計画、実践に活かしていこうとしており、ラオス国立大学農学部の協力のもと実施されています。

京滋 FS 事業は、ラオスと日本の村人、NGO、NPO、地方行政、大学関係者がつくる国際的ネットワーク活動の一環として、日本の農村住民の主体的地域おこしの知見を活かし、日本とラオスの関係者が各自の農村文化をアジア的視野で相対的に評価・学習する機会を

設けています。

プロジェクトの期間は、2008年11月～2010年10月の2年間です。2008年11月に開始されて以来、これまで、プロジェクトの実施体制と協力のための打合せ、農学部カウンターパートの日本招へい、プロジェクト開始、村の活動、インターナショナルワークショップの開催など活動を進めています。

(1) プロジェクトの実施体制と協力のための打合せ

ラオス国立大学農学部（以後、農学部）と現地 NGO、PADETC がカウンターパートとして活動に参加しています。特に農学部と京都大学東南アジア研究所は、学术交流協定を締結するなど、これまで10年を超える協力関係を維持してきました。農学部「ラオ伝統農具農民博物館（以後博物館）」とは、発足当時から運営支援などを続けています。

プロジェクトの実施計画、協働体制を確立するため、農学部と PADETC とは、それぞれ数回の打ち合わせを行い、2009年1月7日農学部、PADETC の関係者が、プロジェクトの構成と人員、事務所の設置場所などについて打合せました。農学部長トンリー氏(Mr. Thongly Xayachak)、PADETC 代表ソムバト氏 (Mr. Sombath Somphone) がそれぞれラオス側プロジェクト代表、アドヴァイザーに、博物館のイントン (Mr. Inthong Somphou)、ブントン(Mr. Bounthone Kanjanda)、スパポン(Mr. Souphaphone Rattanasasy)の3氏がプロジェクト担当に決まりました。博物館内にプロジェクト事務所を置くこと、担当者3名が2009年2月25日から3月13日まで日本を訪問することが承認されました。

その後、2009年10月、農学部と PADETC の打ち合わせの結果、村の資料館に収集する道具や文化、村人の聞き取りなどの調査と情報収集や村人参加の促進、農学部学生のボランティアの組織を PADETC が指導することに決まりました。



写真 5 農学部ラオ伝統農具農民博物館



写真 6 PADETC との打合せ

(2) 農学部カウンターパートの日本招へい

2009年2月25日から3月13日まで滞在し、文化に根差した農村振興や日本の農村の現

状を見学しました。美山町北集落のかやぶきの里民俗資料館では、伝統家屋を活用した集落民俗資料館の設立経緯、運営などの話を聞きました。日本訪問と農村見学の経験は、帰国後、村人やサイタニ郡役所の担当者に、プロジェクトの目指す民俗資料館について説明する時などに大いに役立ったということを聞いています。



写真 7 守山 FS、開発集落での記念撮影

(3) プロジェクトの開始に向けて

農学部は、プロジェクトを実施する村として、農学部キャンパス周辺のドンバン村とタチャンパ村を選んでいきます。この二つの村でプロジェクト活動始めるにあたって、2009年6月15日、農学部の属しているビエンチャン特別市サイタニ郡役所及び、ドンバン村、タチャンパの2村を訪問し、プロジェクト内容の説明と、協力を要請しました。東南アジア研究所実践型地域研究室から安藤と矢嶋が、農学部からイントン氏ほか2名、PADETCから担当のセンスリー氏が参加しました。サイタニ郡役所の関係機関ではプロジェクトに対する協力が了解され、ドンバン村、タチャンパ村訪問には、郡役所副局長と村のある行政区の副地区長など政府の役人が同行し、村人に文化の保全や、農具や民具の保存の重要性を話した後、住民自身で何ができるか考えるように助言してくれました。村からは、村長、党の村書記、副村長、長老、女性同盟役員などの村役が出席し、村でのプロジェクト活動が認められました。ドンバン村は150年以上前に人々が入植した古い村である一方、タチャンパ村は20年前に人々が移ってきて開かれた新しい村です。

翌16日、農学部会議室でサイタニ郡役所の関係部局の担当者、ドンバン村、タチャンパ村の村長と村の役員、PADETC代表を招き、農学部、東南アジア研究所の関係者が出席して、プロジェクト開始に向けた打合せワークショップが開催されました。農学部のイントン氏が日本の農村で見学した内容を報告しました。打合せでは、ドンバン村、タチャンパ村におけるプロジェクト活動の承認と全面的な協力の再確認がされました。



写真 8 プロジェクト開始ワークショップの参加者

(4) 村の活動：タチャンパ村集落民俗資料館の建設とドンバン村の動向

2009年8月、タチャンパ村の村役、農学部博物館の担当が打ち合わせ、小学校のグラウ

ンド脇の土地に、集落資料館の設置が決定されました。建物は2階建てで伝統的なデザインにすることとし、白アリ被害を防ぐため1階部分をコンクリートに、2階の壁と屋根は竹材にするなど仕上げを決め、村役が中心となってデザインし建築金額を見積もりました。2009年10月、建物の最終デザインが承認され、建設スケジュール、村人の役割分担と建設委員（監督、資材調達、建設）委員選出などが行われました。当初2010年2月に完成する計画でしたが、2009年12月にラオスが主催して開催された東南アジア体育大会（SEA Games）のため工事が遅れ、4月のラオス正月に合わせて、開所式を行うことに変更されました。2010年2月現在、1階や2階の躯体工事、壁や屋根工事が終わり、仕上げ工事が進んでいます。3月中に完成する予定であると村長さんは述べておられました。完成式は、タチャンパ村及び周辺の村の参加を得て、地域の物産や文化、農具を展示するイベントを行う計画があります。

一方、ドンバン村は東南アジア体育大会の終了後、政府の文化村事業で正式に登録されたのを受け、現在、農学部がPADETCの支援を受け今後の計画を立てています。

(5) インターナショナルワークショップの開催

G-COEのイニシアティブ2、G-COEラオスFS、トヨタ財団アジア隣人ネットワーク、科研「ベンガル湾縁辺における自然災害との共生を目指した在地のネットワーク型国際共同研究」との合同による国際ワークショップが、ラオス国立大学農学部ナボン・キャンパスにおいて、2010年2月17日から19日まで開催されました。農学部博物館の担当者が、中心となってワークショップの運営をしました。

International Workshop on “The Alternative value of Traditional Agriculture for Education, Research and Development”というタイトルで開催されたワークショップでは、ミャンマー、インドネシア、日本、ラオスの9名の研究者が報告を行いました。

ワークショップ第2日は、タチャンパ村を訪問し集落資料館の建設工事や、農業や機織りなど村の生業を見学しました。ラオス南部の伝統芸能ラムの演奏会が村で開催されました。



写真9 タチャンパ村集落資料館建設模型



写真10 集落資料館建設工事

第3日は、農学部教育に伝統農業をいかに活かすのか、農学部博物館の活用法について、国際的な大学、NGOとのネットワークの立上げと協力体制について、出席者が討論しました。そして、ワークショップのまとめとして、実験室における理論学習に加え農民のために実践的研究を行う方法論の導入、農学部教員の学位取得プログラムの試験的立ち上げ、ミャンマー・インドネシア・ラオス・日本の大学間ネットワークの構築、農学部に附属研究所を設け国内外研究者の客員教授の招へいプログラム導入、ラオ伝統農具農民博物館の教育への活用法の模索などが提案されました。以上のことを目標に、今後国際ワークショップの継続的な開催が決定されました。



写真 11 ワークショップ記念撮影